１　作　　物

| 項　　　目 | 作　　　業　　　内　　　容 |
|---|---|
| | （今月の作業管理のポイント）<br>○麦の管理<br>○早期水稲の移植前後の管理 |
| （１）麦の管理 | ア　赤かび病防除<br>赤かび病は、開花から約10日間が最も感染しやすく（一次感染）、この時期が温暖（気温15℃以上）で連続降雨があると発生しやすくなる。本病が多発すると収量・品質が低下するだけでなく、生成されたかび毒は人畜に有害で、農産物検査では赤かび粒は混入してはならないとされており、麦栽培において極めて重要な病害である。<br> <br>写真１　赤かび病に罹病した穂<br>防除適期は開花期（出穂後７～10日後頃）でトップジンＭ剤などで必ず防除する。多発が予想される場合、７～10日後に追加防除を行う。なお、追加防除の際は、薬剤の使用回数に注意する。３月16日高松気象台発表の１か月予報では向こう１か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ない見込みである。麦の開花状況や天気予報、病害虫防除所の「麦類赤かび病　胞子飛散状況調査」を参考に追加防除を判断する。<br>イ　黒穂病類防除<br>種子伝染性の病害であるので、発病穂は見つけ次第、早期に抜き取る。<br>ウ　排水溝の整備<br>この時期は定期的な降雨があり、地下水位が徐々に高くなる。このため、排水不良のほ場では湿害が助長され、収量、品質低下の要因となるほか、湿害を受け根の生育に障害があると、登熟期に乾燥が続いた時に枯熟れの要因となるため、雨水を確実に排水できるよう排水溝（明渠）を再整備する。 |
| （２）早期水稲の移植前後の管理 | ア　移植前の準備<br>作土層を広げることで、根域が拡大して地上部の生育向上が期待できるため、耕起深15 cmを目標に積極的な深耕を行う。深耕専用の機械がない場合は、トラクタの速度を遅くし、ロータリーで深めに耕起するとよい。 |

| 項　目 | 作　業　内　容 |
|---|---|
| | 　また、ケイ酸資材は登熟向上や倒伏軽減、耐病性強化に効果があり、鉄資材は秋落ち防止に効果があるため、ケイ酸や鉄を含んだ土壌改良材を積極的に施用する。<br>イ　移植時期<br>　極端な早植えは、移植後に霜害を受け、生育遅延を招く恐れがあるため、本県では４月以降（山間地域では４月下旬以降）の田植えが望ましい。また移植後から活着期は深水管理により保温に努める。なお、極端な霜害でなければ、生育はやや遅れるものの、ほとんどの場合は回復するため、植え直す必要はない。<br>ウ　施肥<br>　基肥量の基準は窒素、リン酸、カリの成分がそれぞれ10ａ当たりコシヒカリで３kg、６kg、６kg、あきたこまちでは３～４kg、６kg、６kgである。<br>エ　濁水の流出防止<br>　代かき水（濁水）の流出は、河川の汚染や肥料成分の流出に繋がるため、流出防止に努める。畦畔や水口は代かき前に点検し、漏水が無いように補修する。代かきは浅水状態で丁寧に行い、田植え前の強制落水はしない。<br>オ　除草剤<br>　除草剤の処理後７日間は完全に止水し、除草効果を高めるとともに薬剤成分の水田外への流亡を防ぐ。なお、一発処理剤の多くはヒエの葉齢にあわせて使用時期が決められており、他の葉齢が進んだ雑草がほ場内に混在する場合は、それらに対して除草効果が劣ることがあるので、適用範囲内でやや早めに処理する。<br>カ　病害防除<br>　コシヒカリは、いもち病に弱いため、本病に効果のある箱施用剤を必ず使用する。また、置き苗はいもち病の発生源になるため、補植後は水田に放置せず、速やかに処分する。 |

（作成　農林水産研究所）